

税金をもっと広い視野で

新潟県立長岡高等学校

二年 伊藤 千恵美

私には妹が二人いる。まだ小さいけど、よく喋る。ちょっと毛深いけど。

私は猫を二匹飼っている。ふわふわで、甘えん坊。ちょっとやんちゃだけど。気持ちよさそうに寝ているのを見るのが日課だ。

我が家の歴代の犬猫は、みんな保護された子たちだ。東日本大震災で元の飼い主が分からなくなった子、生まれて尻尾が折れている子、妊娠していた保護猫が産んだ保護猫二世。我が家では彼女たちを私の妹として接してきた。一人っ子の私にとって、かけがえのない家族だ。

私たちはさまざまな場面で税金を払う。物心がついて初めて触れるのは消費税だろう。他にも、親たちは所得税、人によっては固定資産税や酒税、タバコ税まで払っている。これらの税金は、本来なんのためにあるのだろうか。

私の人生を軸に考えると、その答えに辿り着いた。私は今まで、ずっと公立の学校に通ってきた。保育園も公立だったのだから、十五年にも及ぶ歳月を長岡市と新潟県に委ねてきたらしい。私立の知見は皆無だが、私はこれまでの学校生活であまり不満はなかった。快適な空調、時代に合ったICT設備、そして無償の教科書。これらは全て、未

来を担う次世代のため、誰かが払ってくれた税金によるものだった。これを思い出したとき、税金は国の未来を見越したある種の投資だと思った。なんて素晴らしいシステムなんだ！

と、ここで私は終わらない。この大前提に、一石を投じたい。

私はこれを「人間の人間による人間のための税金」だと考えた。調べれば調べるほどこの思いは強まり、人間主体な考え方を改めるべきだと思うようになった。

というのも、猫たちの餌代には10%の消費税がかかる。だが、ここで「餌」を「餌」と定義することの根底には他の生物を「器物」とする法律があるわけで、だからこそ人間の食べ物に軽減税率の対象となるが他の生物には適応されないのだ。

今話題のSDGs。これは、人間だけでなく地球上の全ての生物を豊かにすることを目指す目標だ。税金という資源をうまく活用すれば、今まで以上に他の生命を救えると思う。

例えば、公共の道路や建物が他の生物によって汚された場合の清掃や、犬猫の殺処分をなくすための取り組みはどうだろう。そのために飼い主が一定の犬税や猫税を払うのはどうだろう。現に、ドイツでは犬税が財源として存在している。犬についての法整備も細やかで、犬と人間が共生できる街づくりが行われている。日本でも過去に存在したが、徴税コストや個体数把握の難しさなどの観点から廃止されてしまった。

新たなシステムを作るには多くの課題が出る。それは百も承知だが、私はやはり、そろそろ次世代に沿った新しい税金の形を模索するべきだと思う。子育て世代や高齢者への支援など、既にたくさん課題はあるけれど、私はもっと大局を見据えたい。税金が、より多くの命を救うためのものであることを願う。